児童の主体的、意欲的な学習活動や読書活動を充実する学校図書館の取組

～コロナ禍における学校図書館活動～

山口県周南市立遠石小学校

校長　河村　浩一郎

Ⅰ　はじめに

令和になり、知識基盤社会、AI 社会、Society5.0 等時代がさらに加速度的に変化する中、新型コロナウイルスの感染拡大によって、新たな時代の転換期を迎えている。

このような中、遠石小学校では、学校運営の中に新たな時代に向けた図書館教育を位置付けている。蔵書管理のデジタル化、図書館改造等と図書館の環境が良くなると共に、学校全体で図書館の利用が増えている。地域、家庭、育友会(PTA)と連携した様々な読書推進活動や公共図書館、近隣の学校との連携と連携の幅も広がり、まさに、コミュニティ・スクールとしての取組を推進している。

また、児童による主体的な図書委員会活動も活発に行われ、読書をする児童が増加し、貸し出し冊数も増えている。同時にこれまでの図書館活動に加えて、図書館教育が組織的な活動になり、「主体的・対話的で深い学び」に向かう学習活動も増え、学校全体の学びを支える図書館へと進歩している。様々な調査においても良好な回答が現れ、目指す児童像に向かっている。

そういった取組成果から、令和3年度文部科学大臣表彰「子供の読書活動優秀実践校」として遠石小学校は、受賞し、令和3年度からの取組のスタートに一段と弾みをつけている。

Ⅱ　校区概要

学校は、山口県の南東部に位置する徳山駅から約1．8㎞東にあり、校地の前を県道下松・新南陽線が走り、周南コンビナートが眼前に迫るところにある。また、有名な遠石八幡宮も校区内にあり、門前の町として、市の住宅地として古くから発展してきた。現在マンションも数多く建設されている。市の運動公園や運動施設、緑地公園にも近く、教育環境は整備されている。また、地域の社会教育活動や学校の育友会活動も盛んで、人々が深い絆で結ばれている地域でもある。

Ⅲ　子供の読書を推進する活動の取組

1　活動内容

本校では、学校教育目標「夢と知恵とかかわりを追い求める学校」を踏まえ、学校図書館教育目標として、①本に親しみ感性豊かな子どもを育てる読書活動②主体的・対話的で深い学びになるような学習活動③努力することを認め合い励まし合う人間関係を築く生徒指導の3点を軸に貢献できる図書館活動を、年度始めの職員会議で司書教諭から図書館全体計画を提示し、活動を行ってきた。長年の活動として、読み聞かせ団体「スマイル」による読み聞かせ、親子読書、育友会(PTA)による選書会も実施している。

(1)本に親しみ感性豊かな子どもを育てる読書活動

令和元年度は図書館の改造による環境整備、蔵書管理のデジタル化を行い、令和2年度は、育友会(PTA)の寄贈によって図書館にエアコンを設置した。

また、学校全体の教育課程の中に明確に図書館教育を位置付け、読書活動、学習活動を活性化してきた。図書館の改造による環境整備については、図書館全体が見通しが悪く、分類もバラバラであったため、本棚の位置を変え、日本十進分類法による分類配架にし、様々なサインも作成し、リフォームした。また、老朽化したカウンターを修復し、本棚も新たに面出しが多くできる木の本棚を製作した。この木の本棚は、地域の方に木材を提供して頂き、保護者、地域の方、子ども、教職員で手作りした。

一方、学校内にはさまざまな場所にミニコーナーを設置した。子供達が必ず通る給食室横、校長室と保健

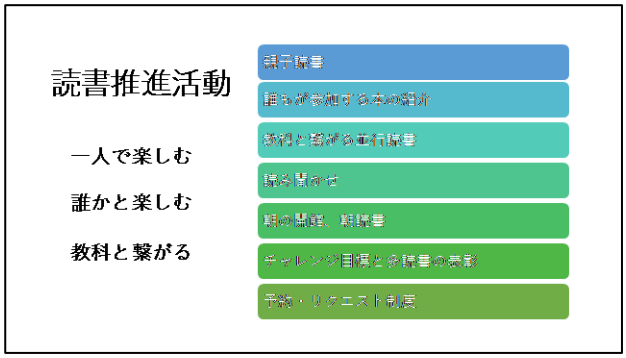
室の近く、図書館近く等である。こういったコーナーに本を展示し、おすすめの本を紹介するときには、実生活に結び付くようにということを心がけている。

また、読書推進活動は一人で楽しむ読書に加えて、誰かと楽しむ、教科と繋がることを目的に様々な取組を行っている。コロナ禍において貸出しを分散するために朝の開館も始めた。

学校内では様々な形で本の紹介をしていて、誰もが参加できる。読書は1人で楽しむものであるが、子供達は面白かったこと、自分の好きなものを誰かに聞いてもらうのが大好きである。本を読んだ感想を伝えることで読みが深くなり、また本をコミュニケーションツールとして誰かと繋がる。それぞれの紹介は本と人、人と人との繋がりを広げていく。

教科と繋がる並行読書は図書館内に国語の教科書コーナーを設置し、単元学習のときには関連する本をクラスの近くにおいてすぐ読めるようにしている。とりわけ教科書に載っている本はリストにしている。

本校では読み聞かせ団体「スマイル」が学期に1回(各学年1単位時間)活動しているが、その時に国語の教科に関連する本を公共図書館から100冊程度借りてきてくださっている。



子供達が負担にならない程度のアウトプットの活動として読んだ本の面白かった度を星の数で表し、一言感想を書いてベストスマイル本として投票する形もとっている。この活動は読むだけに留まらず、少しでも深い読みになること、また、スマイル文庫のさらなる活用がねらいである。ちょっとした取組であるが子供達は楽しんで取り組んでいる。

(2)主体的・対話的で深い学びの学習活動

学校課題解決に向けた取組としては、学びを応援し、知識と繋がる教科活動、学習支援活動を実施している。主に、主体的・対話的で深い学びに係る教科学習、総合的な学習の時間の学習、認め合い励まし合う人間関係を築く子どもの育成に向けた活動の3つである。

これら活動の実現に向けて、教職員に対しては、年度初めに図書館利用のクラス割り当てを行い、前年度の年間レファレンス記録、資料依頼書を提示し、子供達には図書館のしおりを用いて、利用の仕方、図書館の仕組みについて、クラスごとにオリエンテーションを実施している。加えて、学校課題解決型プロジェクトの部会の一つとして「コロナ禍の読書体制チーム」を組織し、計画的・組織的な学習活動を推進している。

たとえば、教科学習の事例では、5年生国語科「和菓子」の単元で和の文化について、調べ学習をした。その際、調べる時は、情報の取り方、まとめ方、出典の記録などを伝えている。

また、総合的な学習の時間の事例では、6年生は、SDGsについて調べた。この時は本校に資料がなかったので、学年の先生、司書教諭、司書等が相談をし、資料を購入・用意し、資料リストを作成してから実施した。学習の成果の発表は、班での発表、ポスター、新聞作成など様々な方法で行ったが、令和2年度はコロナ禍ということでオンラインでの発表も行った。また、図書館も子ども達の成果物の発表の場所になっている。これはまさに「学びの場の図書館」として良い効果を生んでいる。

(3)認め合い励まし合う人間関係を築く生徒指導

認め合い励まし合う人間関係を築く子どもの育成としては、学校課題解決型プロジェクトの部会の「コロナ禍の読書体制チーム」と人権教育担当が連携した事例がある。

「心をみがく参観日」週間に合わせて、人権教育に視点を当てた本、周南市で発行しているパンフレットも共に展

示紹介した。各学年で行われた人権教育の視点に沿った授業に関連する本を職員室に置き、その中から担任の先生が本を選んで読み聞かせを行った。

また、望ましい人間関係づくりの一環として、校内の体制として保健室・特別支援学級との連携も重視している。保健室との情報連携では、特に自分の身体・健康、成長過程について本を通して正しい知識を身に付けさせたり、保健室の行事に合わせた本の展示、紹介、規則正しい生活習慣の中に読書習慣を入れるように呼びかけたりしている。

特別支援学級にはそれぞれ個人の成長に合わせての本の提供、学級文庫の充実、読書サポートツールのリーディングトラッカーの提供などを行い個人の学びを応援している。

2 児童の図書委員会活動

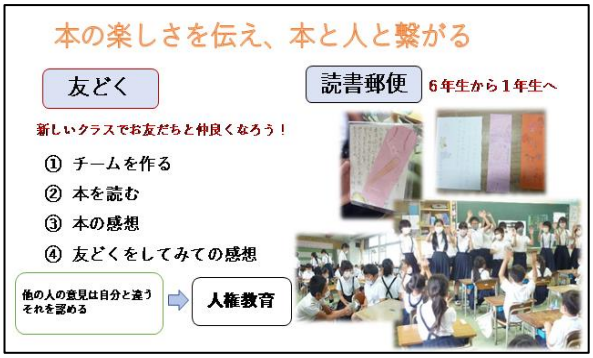
児童の図書委員会活動は、子供達が主体的に活動する大きな原動力である。コロナ禍の前は、お話会もたくさん行っていた。しかし、昨年度はお話会も行えず、伝える繋がる図書委員会活動を目標に、密にならないことを心がけ、本と、人と、知識と繋がるようにと活動を実施した。

(1)友どく

本の楽しさを伝え、本と人とが繋がる活動の事例として、友どく、読書郵便が挙げられる。昨年度は休校期間が長く、始まった当初もソーシャルディスタンスを取るようにと緊張した状態であった。友どくは、物理的な距離はとっても心の距離は取らないように、新しいクラスでお友だちと仲良くなろうとの取組である。つまり、家どくの友だちバージョンである。チームを作り、本を読み、本の感想と友どくをしてみての感想を書いた。子供達はチームの名前を考えるところから楽しみ、友どくの後の感想には他の人の意見は自分と違うこと、それを認めるという本校で取り組んでいる人権教育に通じる成果も自然と表れてきた。

(2)読書郵便

読書郵便は子供達に人気のイベントである。いつもの読書郵便に加えて、新6年生が休校中に、入学が遅れていた新1年生へのプレゼントとして、しおりと共に作った。入学後、6年生から貰った1年生はとても喜んでおり、新6年生も全ての行事が中止になる中、最高学年としての実感がわいた取組になった。



(3)お守りづくり

人と人が繋がるイベントとしてはお正月に行っていたお守りづくりを敬老の日に合わせて実施した。コロナ禍でおじいちゃん、おばあちゃんに会えないことも多く、お守りを作ってプレゼントしようというものである。このお守りは読み聞かせ団体「スマイル」にもプレゼントした。中には心のこもったメッセージが入っている。知識と繋がるイベントとしては、図書館クイズも行った。

3 広報活動

広報活動はホームページによるお知らせ、保護者に向けての図書館だよりを月に一回発行している。また、図書館がデジタル化したことにより、家のネット上から本校の蔵書の検索も可能とした。

4 地域連携活動

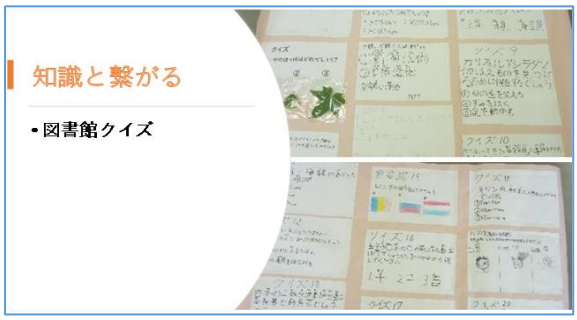
図書館は様々な方々に支えられ、連携をしながら活動をしている。保護者と、地域と、公共図書館と、近隣の小中学校である。

公共図書館からは本校で不足している資料を数多く借りている。一方、図書室にネット環境が整い、蔵書検索、予約が容易になり、子供達が読みたい本が本校にない場合、すぐに予約して借入できるようになった。本校に蔵書がなく、公共図書館にも所蔵がなくリクエスト制度を利用した事

例もある。公共図書館のイベント、友どくコンテストには全校をあげて参加した。

近隣の小中学校とは、相互貸借、人の交流を実施している。中学校からは本校に不足の資料を借り入れている。また、人の交流として、本校で活動してくださっている読み聞かせボランティア「スマイル」を中学校に、英語の読み聞かせの方を小学校に紹介して活動の場所を広げている。日頃からの情報交換、交流があるからこそできた取組である。これらの様々な連携は図書館活動にはなくてはならないものである。

子供達の読みたい、知りたいの気持ちに真摯に応え、学校全体の学びの応援になるようにと図書館活動を行っている。



Ⅳ　活動の成果

1　児童、保護者、地域の様子

・令和2年度学校評価の児童の質問事項「読書が好きで、本をよく読んでいる」において、「あてはまる」「ややあてはまる」の回答が、前年度比プラス10ポイントの結果となった。

・朝の貸出や学校全体で図書館を活用した学習の取組が増えたことにより、学校図書館利用者が大幅に増加した。

・図書委員会を主体とした様々な図書館活動によって、高学年児童が低学年児童を思いやる場面が数多くみられるようになってきた。

・家庭・地域を巻き込んで取り組むことで、それぞれ関わる方々の意識が高まり、学校全体の学びを支える図書館へとなりつつある。

・遠石小の学校課題「主体的・対話的で深い学び」に係る令和2年度学校評価の児童の質問事項「自分の考えや思いを友達に伝えたり、発表したりする」において、「あてはまる」「ややあてはまる」の回答が、前年度比プラス4ポイントの結果となり、児童が主体的・対話的に学ぶ姿勢が身に付きつつあることが伺える。

・遠石小の学校課題「「認め合い励まし合う人間関係づくり」に係る令和2年度学校評価の児童の質問事項「お互い助け合い支え合う学級になっていますか」において、「あてはまる」「ややあてはまる」の回答が、前年度比プラス4ポイントの結果となり、児童同士が認め合い、支え合う関係に育ちつつあることが伺える。

・蔵書のデジタルデータ化や図書館の改造によって図書館の環境がよくなり、学校全体で図書館の活用が増えると共に図書館での貸し出し冊数も増えている。また、司書教諭を中心とした「コロナ禍の読書体制チーム」等、司書を含めた組織的な活動になり、図書館を利用した学習活動も増えている。

【受賞歴】

・令和3年度　文部科学大臣表彰　「子供の読書活動優秀実践校」受賞

・令和元年　山口県教育委員会表彰　読み聞かせボランティア「スマイル」受賞

Ⅴ　終わりに

課題である「本当に児童にとって主体的に読む態度は育ってきたのか」、そして、「図書館を学びの場としているか」という点を司書教諭、学校司書、そして保護者、地域の方の意見も参考にしながら、指導計画を見直し、授業改善を進めていきたい。そのためには、図書館に関わる様々な方々の情報交換の時間、場を生み出すためのシステム化が大事になってくる。或いは、保護者・地域との更なる連携を視野に入れたカリキュラムを作成することが発展につながると考えられる。

様々な読書のイベントがコミュニティ・スクールを中心に普通に推進されていることに、本校では全く違和感を感じなくなった現在、関わる方々の間の心理的距離も大きく縮まってきている。そして、連携する上で本当に重要な課題は、教職員、保護者、地域が互いに実践を創造し、交流し合い、司書教諭、学校司書を中心とした全ての教職員が専門家として育ち合う連帯を形成していくことであると考える。

子供達が、学校図書館を核として、互いが支え合い、学び合うことのできる時間を共有し、豊かな関わりを積み上げていけば、「図書館」は「学びの文化の場」に変えることができると考える。

取組は、緒についたばかりであるが、これからも地道に実践を継続してきたい。

執筆責任者　学校司書　花﨑昌代